

再発見！何でも見てやろう

2021年2月25日(木)

天満天神繁昌亭

池上憲治記



今日は、受講生 62 人が 9 時半に集合して「上方落語体験講座」が行われました。10 時から 45 分間は桂 壱之輔・小留・遊間・入谷和女 による落語解説とお囃子の紹介で、その後の 20 分は桂 小留の落語、そしてその後の 25 分は桂 壱之輔の落語で 11 時 30 分終了でした。

10 時からは、桂 壱之輔さんの落語解説が始まりました。桂 壱之輔さんは大阪市出身の昭和 53 年生まれの 43 歳で、桂 春團治一門です。

この繁昌亭は、15 年前に完成し、入場定員は 216 人ですが、現在は制限していて、102 人です。今日の入場者は私達の貸し切りで、62 人でした。

先ず、落語については 5、6 分から 1 時間の話であり、落語を短くしたのが小咄で、ダジャレが多く、一番短い小咄は天国の小咄で、「あのよ」だそうです。他に、草（臭）かったという桃太郎やボチが放さんかじいさんと言ったという花咲かじいさんという小咄もありました。

落語家の持つ道具は扇子と手ぬぐいで色々な事を表現出来ます。

楽器としては、専門の人が弾く三味線と、楽屋にいる落語家が演奏する太鼓類です。

現在、三味線を弾く人は 20 人くらいで、落語家は 270 ~ 80 人くらい居ることです。

楽器の説明もありました。楽器は、三味線の他に大太鼓、小太鼓、あたり鉦、拍子木、ドラを使いますが、小太鼓は「締め太鼓」が正しく、付いている紐の締め方で音の強弱が変わります。又、当り鉦（チャンチキ）は本来は「摺鉦（すりがね）」というそうです。そして、開演 30 分前は一番太鼓を打ち、その音はドンドンドンと来いと言っています。開演 2 ~ 3 分前は二番太鼓が鳴り、お多福来い来いと締め太鼓が言います。

出囃子については、前座でもトップに出る者の入り込みに「石段」という曲が流れ、「早く石段を上がって

出世するように」との意を込めて尻を引っぱたくように急速調で急き立てます。

10 年頃くらいのベテランの落語家は出囃子が各人によって異なります。桂 壱之輔さんの師匠の桂 春團治師匠の出囃子は「野崎」が演奏されます。

私は以前この繁昌亭に来て、落語家協会会长の笑福亭仁智師匠の落語を聴いたことがあります、その時の出囃子は「オクラホマミキサー」でした。

上方落語では、はなしの背景に囃子や歌を伴奏として入れ、情景描写や心理描写に用いますが、これを〈はめもの〉といい、雨や雪、そしてお化け（幽霊）の出て来る場合に多く使われます。桂 壱之輔さんの落語解説が終わると、次は桂 小留（ちろる）さんの落語でした。

桂 小留（ちろる）さんは大阪府出身の31歳の若手で、師匠は桂 小枝さんで、弟子はかかおさんというチョコレート一家で、小枝さんが命名したそうです。桂小留さんは、洒落話2つで、阿弥陀が池（阿弥陀が行け）とぬかに釘（首）でかなり大きな動作での熱演でした。

最後に又、桂 壱之輔さんの落語があり、「商店街の中心で、愛をさけぶ」という「世界の中心で、愛をさけぶ」というドラマを基にした落語でした。
「創作落語」は上方の落語家たちによる造語だそうですが、
「創作落語」は決められた時間の中で話をまとめる必要があり、
大変な推敲と時間が必要だと思われます。



葛井寺拝観と道明寺天満宮の梅

池上憲治記

今日は、近鉄南大阪線の藤井寺駅に30人程の受講生が集合して、先ずは歩いてすぐのところにある葛井寺へ向かいます。途中にある藤井寺市商工会の「ゆめぷらざ」という藤井寺まちかど情報館で必要な資料をもらいました。

葛井寺は、大阪府藤井寺市にある真言宗御室派の寺院で、藤井寺や剛琳寺とも言い西国三十三所第五番札所であり、本尊の国宝乾漆千手觀音坐像は、大阪府下唯一の天平仏で、1043本もの手を持つ珍しい仏像です。また、四脚門は桃山様式をよく伝える建造物として、国指定の重要文化財となっています。

そして本日18日は、毎月18日に行われる觀音会座（御本尊御開帳）の日であり、開帳される觀音様と縁を深く結び、格別のご利益を受けることが出来る日です。ご利益を受ける仏様は、毎日決まってい、それを三十日秘仏と言いこうした縁日の基礎となったもので、西暦900年代に中国で30日に30の仏様を配して礼拝するように定められたもので、18日が觀音様であるということです。

本堂で、国宝本尊千手千眼觀世音菩薩を参拝してしばらくすると沿革を中心としたご住職のお話がありました。葛井寺は、山号を紫雲山といい、奈良時代に聖武天皇によって葛井連（ふじいのむらじ）氏の邸宅地に建立され、春日佛師に命じて千眼觀世音菩薩を造らせ、神亀2年（725年）に僧行基が開眼法要を行ったとされています。一般的には、寺の名前から葛井氏の氏寺として創建されたとされています。そして1096年に大和の藤井安基が伽藍の大修理に尽力したことから、「藤井寺」というようになり、地名として「藤井寺」が残ったといわれています。平安時代以降は、西国三十三所觀音靈場の第五番札所として多くの庶民の信仰を集めてきました。

戦国時代の兵火による焼失や大地震で伽藍が荒廃しますが、多くの信者の尽力によって修復され、今日に至っています。今日18日に開帳される国宝本尊千手千眼觀世音菩薩は貴重な仏像です。この千手觀音は、小脇手だけで1,001本、中脇手40本、合掌する大手2本、全部で1,043本の手を持っています。脇手の全ての手のひらには、一つずつの眼が彫られています。その理知的な表情と写実的な表現は、唐招提寺の千手觀音像と並んで、たいへんすぐれた千手觀音菩薩像と讚えられています。ご住職の話の最後は、合掌についてでした。合掌は一般的には3種類あり、ほとんどの人がしている堅実心合掌と指を少し開き、交互に組むようにして右手を手のひらを合わせる金剛合掌と、手のひらと手のひらの間を少し開ける虚心合掌がありますが、その虚心合掌より更に膨らました蓮華合掌は蓮の蕾を表わし、悟りの世界に近づこうとする合掌です。お話を終わると裏の部屋で寺の沿革等に関する動画があり、しばら



く鑑賞した後は、本堂前に全員が集合して、すぐ近くにある辛國神社に向かいました。

辛國神社の鳥居をくぐると皆の足が止まりました。右手に梅の花があり、すぐ近くでメジロが1羽盛んに花の蜜を吸っているという珍しい光景でした。辛國神社は、今から1500年程前、雄略天皇の御代に創建された神社で、平安時代には官社となり、式内社として人々の尊信を集めて来た神社です。この地方を治めることとなった物部氏は、その祖神を祀ったのが辛國神社の始まりでその後、物部同族の辛國連(からくにのむらじ)が祭祀の中心となり辛國神社と称するようになりました。

室町時代(義満の頃)河内守護職畠山基国氏が社領二百石を寄進してその祭神、天兒屋根命を合祀したと伝えられ、明治41年には、祭神素戔鳴命を合祀して現在に至っています。

広い道を西に進んで行くと、程なく大きな建



物に到着しました。それは建物自体が大きな櫓の形をした4階建ての藤井寺市立生涯学习センターで、アイセルシュラホールと言います。アイセル シュラ ホールのアイセルとは、Activity(活動)、Information(情報)、Consultation(相談)、Exchange(交流)、Learning(学习)の頭文字で、シュラは、藤井寺市から出土した古墳時代に巨石を運搬したと思われる修羅のことです。建物の外観デザインは、船形埴輪と修羅をモチーフに、歴史を継承し未来へと出帆する船をイメージしています。

まずは、1階右手にあるサロンでの弁当昼食の時間となりました。昼食後は2階にある各種展示コーナーの展示物を観覧します。先ず目に入るのが、この建物の名前の一端でもある「修羅」についての説明です。修羅は藤井寺より出土した重要文化財の、古墳時代の技術が輝る巨大な木製そりのことです。修羅は、重い石材などを運搬するために用いられた木製の大型そりで、機械のなかった時代に重いものを運ぶ重要な手段でした。コロ等の上に乗せることで、摩擦抵抗を減らすことが出来ます。二股に分かれている先端部を舟の舳先のように前方へ向け、これに巨石を乗せ、ロープで曳くことによって、力を一方向に集中出来るのです。

修羅の出土地は土師氏(はじし)の本拠地のひとつである土師の里遺跡にありますが、この修羅も土師氏が関わったと考えられます。それは土師氏が古墳造り全般を行った氏族であると推定出来るからです。

生涯学习センターが「シュラホール」という愛称で呼ばれるのは、船と修羅をイメージしたこの建物の形からです。尚、小修羅は藤井寺市立図書館、大修羅は一昨年この講座で私達が訪問した大阪府立近つ飛鳥博物館に展示されていました。歴史展示ゾーンでは、藤井寺市内の遺跡から見つかった道具を展示し、旧石器時代から奈良時代までの変遷を学ぶことができます。大きな展示品として円筒棺が目を引きます。ここから近くにある土師の里の8号墳の中央に埋められていた円

筒埴輪の形をした棺です。二本の円筒形の埴輪質の土製品を本体にし、両側を鉢の形をした埴輪質の土製品でふさいでいます。円筒部の直径は約60cmで、全体の長さが2.5mあり、内部に残っていた少量の骨から若い男性が葬られていたことが分かりました。又、重要文化財の津堂城山古墳出土水鳥形埴輪三体も展示されています。それはコハクチョウを模した埴輪で、コハクチョウを実物大で写実的にもした水鳥形埴輪で、現在のところ最も大きくて、最も古い水鳥形埴輪です。津堂城山古墳のように大きい前方後円墳には、前方部や後円部の頂上、造出し、堤などに区画が設けられ、いろいろな形象埴輪が並べられました。

津堂城山古墳ではこれまでに、家、身を守る盾、矢を入れて背負う道具の鞍(ゆぎ)、飾りのついた傘の衣蓋、豪華な团扇のさしば、ハクチョウ等を模した形象埴輪が見つかっています。

歴史展示室では、「倭の五王の時代」をテーマにした遺物(鉄剣、武具、埴輪など)を展示しています。倭の五王は、中国南朝の宋帝国(劉宋)の正史『宋書』に登場する倭国の五代の王、讚・珍・濟・興・武をいいます。四世紀の終わりには、それまでよりはるかに大きい前方後円墳が大阪平野に次々と造られます。藤井寺・羽曳野市の古市古墳群と堺市の百舌鳥古墳群です。巨大な墳丘とそこには膨大な数の鉄器も埋められています。大王は、誰よりも大きな古墳を築くことで、国内の最高権力者である事をしました。そして、東アジアの中心であった中国に使者を送り、国際社会の仲間入りをしようとした。館内での展示物の参観が済むと、館を出発しましたが、すぐ近くに小さな古墳があり見に行きました。それは藤の森古墳といい、5世紀後半の墳丘の長さ(直径)2.2mの円墳でした。応神天皇陵古墳前方部の西約100mにあった古墳で、1965年に大阪府水道部美陵ポンプ場の建設に伴い発掘調査されました。南に開口する右片袖式の横穴式石室を持っています。壁面には赤色顔料が塗布されており、幾内で最も早く横穴式石室を採用した古墳と考えられます。石室はポンプ場内に移築されましたが、上水道部施設の為、見学出来ませんでしたが、各方面的協力により、ここに移築され、百舌鳥・古市古墳群において、唯一見学出来る石室として貴重な文化遺産です。

来た道を戻って、藤井寺駅から近鉄電車に乗り、2駅東にある道明寺駅まで行きます。道明寺駅西側には、大坂夏の陣・道明寺合戦記念碑が立っています。慶長20年(1615年)に起こった大坂夏の陣・道明寺合戦では真田幸村軍と伊達政宗軍が激突し、戦国の歴史が大きく動いた戦いで有名で、片倉小十郎、後藤又兵衛、薄田隼人など名だたる武将が戦いましたが、そのことを歴史に残す記念碑です。

道明寺天神通り商店街を西に歩きます。しばらく歩くと、埴輪窯元跡復元という表示板がありました。それは5世紀中葉から後半にかけてのもので、20基以上あり、円筒埴輪や形象埴輪が出土しています。少し登り坂の道を歩いて行くと、道明寺天満宮があり、すぐ向こうに蓮土山道明寺があり、参道から入山します。参道には紅梅や白梅が満開近くに咲いています。

道明寺は、古墳造営に携わった土師(はじ)氏の氏寺(土師寺)として7世紀代に建立されたと考えられます。土師氏の子孫の菅原道真公ゆかりの寺で、道真公の別名道明から道明寺と呼ばれるようになりました。この寺はもとは道明寺天満宮の南側にありましたが、明治時代の神仏分離により天満宮と分離され、現在地に移転しました。江戸時代の境内図から、四天王寺式伽藍配置であったことが知られます。本尊の十一面觀音菩薩立像は、檜の一木造で、細部にいたるまで緻密な彫刻が施された、代表的な檀像彫刻(白檀や梅(せん)檀などの香木を彫刻した仏像)として国宝に指定されています。

参拝後はすぐ東にある道明寺天満宮へ向かいます。この天満宮は菅原道真公ゆかりの神社で、古墳造営など土木技術に長じた土師氏の氏神としたとも考えられます。古くは土師神社と称し、菅原道真公・天穗日命(あめのほひのみこと)菅公の叔母覚寿尼(かくじゅに)を祭神としています。菅公の遺品として銀装革帶(ベルト)や青白磁円硯など平安時代の美術工芸の代表作が伝えられており、国宝に指定されています。境内に入ると、君が代の國家に詠まれているさざれ石が置いてあり、この岩は白亜紀後期(約7千万年前)の和泉層礫岩です。悠久の歳月の間に多くの小石が寄り集まって出来たもので、河内長野市滝畑から平成の御大典記念として移したものです。

広い境内には、約80種800本の梅林があり梅の名所として知られ丁度今の時期の2月10日(水)から3月14日(日)まで梅まつりが開催されていました。梅林は境内の奥にあり、丁度満開で、紅、桃、白、黄色とあり、皆美しいと愛でていました。

1本だけ別の木があり、それは花はつけていませんでしたが、楷の木といい、別名は孔子の木というそうで、2500年前に孔子廟前に孔子の弟子の子貢が植えた、故郷の木の種を今に伝える珍しい木だそうで、秋の紅葉の時期は真っ赤な木になるようです。梅まつりでは、梅園の鑑賞だけではなく、盆梅展や猿回しも行われていて去年まではかなり賑やかであったのだろうと思われます。



再発見！何でも見てやろう

2021年1月6日（水）

（神戸海洋博物館・カワサキワールド）

池上 憲治

今日は神戸市中央区のメリケンパークにある神戸海洋博物館・カワサキワールドを観覧しました。神戸海洋博物館は、海・船・港の歴史と未来を体験する博物館で、カワサキワールドは同じ屋内にある、神戸の地で生まれ1世紀以上の歴史を持つ川崎重工グループの企業ミュージアムです。

午前10時には今日の受講生17人が博物館前に集合し入館しました。

神戸海洋博物館は、1階は4つのコーナーがあり、2階はポパイが解説するトルシップとマリンシアターに分かれ、1階の左奥にはカワサキワールドがあるという内容になっています。順路としては、入館してすぐ目の前にある4つのコーナーを観て、その後は2階のポパイコーナーで、最後にカワサキワールドに行きました。



神戸海洋博物館は「神戸とみなとのあゆみ」をテーマに港の発展と神戸港の関わりを伝え、未来の海事人材の育成に寄与する施設として令和2（2020）年2月5日にリニューアルオープンしました。

国際湾岸都市「神戸」の歴史はもとより、船や港のしくみや役割、様々な先進技術が投入された船艇の展示を展開。また、神戸港の開港以来、その歴史とともに歩んできた川崎重工の企業博物館「カワサキワールド」が隣接しています。

1987年、「神戸開港120年」を記念して開館した



「神戸海洋博物館」は、千数百年の昔から天然の良港として栄え、中国大陸や朝鮮半島との交易の窓口として、また瀬戸内の海の要衝として、歴史上重要な役割を果たして來た「神戸」の歴史、海・船・港の過去・現在未來を展示した総合博物館です。



入館するとすぐ左の壁に動画が映し出されています。神戸港開港150年シアターと言い、神戸港海洋博物館を印象づけるシアターで、ロドニー号とエントラン

スホール全体を使い、ロドニー号が大海原を超えて神戸港にやって來る映像と、神戸開港から150年のあゆみを感じる2本の映像で来館者を包み込みます。

上に記したロドニー号というのは、神戸港開港を礼砲で祝したイギリスの旗艦です。旗艦（きかん）とは、司令官（司令・司令長官などを含む）やその幕僚が座乗し、指令・命令を発する艦を指します。ロドニー号は1833年にイギリスのペンブローグ造船所で進水

したイギリス海軍第2級戦艦で、建造当初は大砲を装備した帆船で、1860年に蒸気機関によるスクリュー推進に改造されました。

正面のメインホールでは、ロドニー号の他に、神戸港の行き交う船たちのテーマで沢山の船の模型が展示されています。

1492年にコロンブスは大西洋を横断したサンタマリア、江戸時代初期に日本に来た東インド会社の船・リーフデ、イギリス海軍の主力艦・ソブリン オブ ザ シーズ、フランス王朝の最盛期の船・ソレイユ ロワイヤル、建造技術を誇ったオランダの貨物船・S TATE N JACHT、トラファルガーの戦いのネルソン提督の船・ヴィクトリー、ナポレオン戦争時代のイギリスの戦列艦・ベレロフォン、進化論を唱えたダーウィンの愛船・ビーグル、中国の茶葉を高速で運んだ交易船・カティ サーク、幕末に太平洋を横断した勝海舟の船・咸臨丸、洋船技術を取り入れ神戸で建造したスループ艦「大和」、日本初の外国航路に就航した貨客船・廣島丸、大惨事の当時世界最大の豪華客船・メールシップ タイタニック、日本のクルーズ客船の先駆け・ふじ丸、絢爛豪華な内装を誇る「海の女王」・クイーン・メリー2、輸送効率を飛躍的に向上させた日本初のコンテナ船・箱根丸、省エネと合理化の運航を実現した近代タンカー・田川丸、西回り航路でブラジル移民を運んだオランダの貨物船・ボイスベン

以上の19隻の船の模型は正面奥まで展示されていて、奥にはメディアテーブルがあり、神戸港から輸出・輸入される国々への航路網とその取扱い貨物や、港で活躍する様々な船を紹介する体験型装置で、港の行き交う船に触れるとそれぞれの役割や特徴が分かるようになっています。

右奥には「神戸港あゆみとはたらき」というコーナーがあります。神戸港開港から今日までの歴史や神戸港の役割と機能を伝え、操船シミュレーターなどの体験型コンテンツを通じて海・船・港の仕事の重要性を理解して、未来の海事人材育成を行っています。

「神戸港あゆみとはたらき」のコーナーの一画に二つのゲームコーナーがあります。一つは「ガントリークレーンシミュレーター」といい、駅や機関区（車庫）の荷役設備として、門形になった跨線(こせん)式（通常は2~3線路をまたぐ）のクレーンのこととで、2本のレバーで操作して、船に積まれたコンテナを吊り上げてトラックに乗せる体験が出来るシミュレーターで、ゲーム感覚で遊びながら、クレーンオペレーターの仕事を学ぶものです。私も実際にレバー操作して前後左右上下にコンテナを動かしてみましたが、それ程難しいゲームではありませんでした。

もう一つは神戸港操船シミュレーターと言い、神戸港を再現した映像の中でクルーズ船を操縦出来るシミュレーターです。定められたポイントを回り、制限時間内にゴールを目指します。天候や視点などの条件が設定出来るため、航海士の仕事をより本格的に体験出来ます。こちらの方は、操縦と船の速度の関係を把握するのが難しく、初心者向けはさほどでもありませんでしたが、上級者向けでは、途中から他の船が現れて来て、ぶつからないようにする必要があり、また制限時間内に最適ルートを進む必要もあり難解でした。博物館の「神戸港・あゆみ



「とはたらき」の展示物等を観て回り、右手手前にある「神戸港・国際交流」のコーナーを観覽します。これまでに神戸港を訪れた客船や姉妹都市・姉妹港、日本で初めて輸入されたゴンドラとともに歩んで来た神戸海洋博物館の歴史など、神戸港と世界各国の国際交流を様々な角度から紹介されています。

ゴンドラは、昭和43年7月1日にイタリア政府とベニス市の特別な厚意により、我国に初めて実物が輸入されました。船尾左舷側のポッパ（Poppa）と呼ばれる台の上に船頭（ゴンドリエーレ）が立って、長さ約3mの櫂によって船を推進させます。

ここ神戸海洋博物館のあゆみについても表示されています。この博物館は、神戸開港90周年記念事業で設置計画が進められ、1963（昭和38）年4月26



日に中突堤で開館した神戸国際港湾博物館から始まります。同年11月21日にオープンする神戸ポートタワーとともに、神戸港ならびに「海・船・港」の普及と振興に努めてきました。

そして、神戸海洋博物館は、神戸国際港湾博物館の使命を引継ぎ1987（昭和62）年4月30日、神戸開港120年記念事業によってメリケンパークで開館しました。「海・船・港の未来」をテーマにした展示をとおして、未来を担う青少年たちに海のロマンと知識を伝え続けています。

神戸は世界3カ国の港湾都市3港と姉妹（友好）港提携、また8カ国10都市と姉妹（友好）都市、親善協力都市の提携を結び、港を通しての交流、市民相互の交流により、国際交流、国際理解に努めています。

メインホール1階の展示物を観覧した後は、2階に上がります。
2階は「ポパイが解説するトールシップ（帆船）」と表記されています。
90年以上、世界中で愛され続けているポパイとその仲間たちが、トールシップ（帆船）を解説します。コミカルなポパイのイラストと合わせて、歴史上のトールシップから現在活躍中のトールシップまで、模型・資料約40点以上を展示しています。

主な展示内容は5つです。
1. 船の歴史

丸太を組み合わせたいかだや、丸太をくりぬいた丸木舟からより遠く、強く、速くと用途に合わせて進化し続ける船と船を動かす仕組み別に歴史を紹介しています。「観光丸」「いくた」「フリースランド」等がそれです。

2. 誇らしいトールシップについて
風の力で動く帆を持つ船をトールシップと呼び、その名前の由来や構造を紹介しています。

3. 強くてやさしいトールシップ
トールシップが世界中の海で活躍していた時代の模型と関連グッズを解説パネルと合わせて約15点を展示しています。展示模型としては、「咸臨丸」「黒船サスケハナ」「スパニッシュ・ガレオン」「ゴールデン・ハインド」等です。

4. 船で働く人達
船に乗って働く人々（船員）の役割を写真とパネルで紹介しています。貴重な船員ユニフォームの実物展示も必見です。

5. 人を育て続けるトールシップ

エンジン船が主流になった現代もトールシップは、活躍し続けています。未来の人を育てるトールシップを紹介しています。展示模型は「日本丸」「みらいへ」です。

2階にはマリタイムシアターもあります。180インチの大型スクリーンと立体音響システムを備える、全33席のシアターで、神戸港の歴史、海・港・船をテーマに興味深い映像を展示しています。今日の内容は、福原京再現CGで、平清盛の夢と1180年平清盛が行った神戸への遷都・幻の福原京です。

2階でも展示物等を観覧した後は、館内1階左奥にある「カワサキワールド」へ参ります。

船舶、鉄道車両、航空機、モーターサイクル等、神戸に生れ、日本に、そして世界に最新のテクノロジーを送り出す川崎重工グループ。陸・海・空の各分野で活躍する、そのテクノロジーの歴史、現在、そして未来を、カワサキワールドで体感出来ます。

カワサキワールドには8つのコーナーがあります。



1. 創業者紹介・ヒストリーコーナー

創業者・川崎正蔵、初代社長・松方幸次郎についての紹介で、また、1世紀以上にわたる川崎重工グループの歴史を紹介しています。

2. カワサキワールドシアター

約14mのワイドスクリーンに多彩な製品を、迫力ある映像で紹介しています。

3. モーターサイクルギャラリー



Kawasakiモーターサイクルの歴史マシン、レース車など、数多くの実車を展示しています。

4. 陸のゾーン

0系新幹線の実物を展示。客室や運転室にも入ることができます。

5. 海のゾーン

船のかたちをした、ものづくりシアターでは船舶の進水式や新幹線・航空機が出来るまでを映像で紹介しています。

6. 空のゾーン

大型の川崎バートルKV-107II型ヘリコプターの実物を展示。操縦室、客室内部を観ることができます。

7. パフォーマンスロボット

工場で働く産業用ロボットたちが、働きながらその特徴を紹介しています。

8. カワサキワールドTECHNO-LABO(テクノラボ)

川崎重工の製品の技術をイラストや動画を用いて個性豊かなキャラクターたちが紹介しています。

今日は、神戸海洋博物館・カワサキワールドを観覧しましたが、その展示物の船の模型や神戸港の解説等大変多くて詳細であり、神戸の歴史と魅力についてとても今回だけでは覚えきれない内容でした。後日再訪して、再度詳細に観覧して更に理解を深めたくなるような素晴らしい博物館でした。



特別短期講座 **再発見！何でも見てやろう**
第7回目講座

(東大寺ミュージアムと東大寺周辺)

今日は受講生25人が10時に奈良の東大寺ミュージアム前に集合しました。その場所には「なら・観光ボランティアガイド・朱雀」という8人ガイドの人達が居て、班ごとに分散して色々と案内して頂きました。



先ずは、東大寺の大仏殿に向かいます。参道を少し北へ歩いて行くと中門があり、そこから中へ入ると回廊がぐるっとあり、正面に大仏殿が見えます。中門内の参道には背の低いベニカナメモチ(紅要躑躅)が植えられていて所々赤くなっています。そしてその近くには「ナラノヤエザクラ」が多く植えられています。奈良の八重桜ではなく、「ナラノヤエザクラ」という桜の固有種で、もともと奈良時代に現在の奈良公園周辺に咲いていたのは、この種類だったと言われ、「いにしへの 奈良の都の 八重桜 けふ九重ににはひぬるかな（伊勢大輔）」と詠われたことでも知られます。また、奈良市の市章、奈良市・奈良県の花にもなっているそうです。奈良公園、特に大仏殿の周辺で多く見つかりますが、木そのものは小さく、花も小ぶりで普通の八重桜のような豪華さは無く、ツボミは濃いピンク色ですが、花が開いた直後は白っぽく、散る前にはピンク色になってきます。そのため、一本の木でも薄いピンクと濃いピンクの花が混ざったように見えるようです。

中門から大仏殿を見ると屋根の上に一対の金色の鷗尾が向かい合って飾られています。

鷗尾（しひ）とは、瓦葺屋根の大棟の両端につけられる飾りの一種で、訓読みではとびのおと読み、沓（くつ）に似ていることから沓形（くつがた）とも呼ばれます。鷗尾は魚の形をしていて、キハダマグロという別名のシビから来ていて、海の中に住んでいるので、屋根に飾ると火事にならないということで屋根に飾られます。



大仏殿のすぐ前に八角燈籠があります。東

大寺金銅八角燈籠は、高さ4.6mの巨大な燈籠です。燈籠の基本構造としては奈良時代の創建当初から残され続いている大変貴重な存在となっており、日本最大かつ日本最古の燈籠として国宝にも指定されています。美しい装飾が施されている外観をよく見ると、8つの面を持つ燈籠の火を灯す空間を覆う「火袋」と呼ばれる部分には、東西南北4面には獅子の透かし彫りが、また北西・南西・北東・南東側の4面にはそれぞれ「音声（おんじょう）菩薩」が彫られており、北西側



「経」が、下部には「施燈功德經」が刻まれているなど、細やかな装飾や表現が特徴的な燈籠となっています。

大仏殿に入って行きます。奈良時代は、華やかな時代であると同時に、政変・かんばつ・飢饉凶作・大地震・天然痘の大流行などが相次ぎ、惨憺たる時代でもありました。このような混乱の中、神亀元年（724）2月、聖武天皇が24歳で即位され、待ち臨んでいた皇太子基（もとい）親王が神亀4年（727）に誕生されました。ところが、神亀5年（728）9月13日、基親王は1歳の誕生日を迎えて夭折し、聖武帝は親王の菩提を追修するため金鐘山寺を建立して、良弁（ろうべん、のちの東大寺初代別当）を筆頭に智行僧9人を住持させました。天正12年（740）2月、河内国智識寺に詣でた聖武天皇は、『華厳經』の教えを所依として民間の力で

のものは尺八を吹き、南西側のものは横笛を、北東側のものは銅鉢子（どうばつし）と呼ばれるシンバルのような楽器を、南東側のものは竽（う）と呼ばれる細い竹の部材を集めて作った楽器を奏でる姿が描かれています。また竽と呼ばれる燈籠を支える柱の部分は、八角形の柱の上部と下部を分ける線が引かれ、上部に「菩薩本行



盧舎那仏が造立され信仰されている姿を見て、盧舎那大仏造立を強く願われたと言われています。

天正13年（741）に、国分寺・国分尼寺（金光明寺・法華寺）建立の詔が発せられたのに伴い、この金鐘山寺が昇格して大和國金光明寺となり、これが東大寺の前身寺院とされています。

盧舎那仏の名は、宇宙の真理を体得された釈迦如来の別名で、世界を照らす仏・ひかり輝く仏の意味で、左手で宇宙の智慧を、右手に慈悲を表わしながら、人々が思いやりの心でつながり、絆を深めることを願っておられます。

東大寺は国分寺として建立され、国家の安寧と国民の幸福を祈る道場でしたが、同時に仏教の教理を研究し学僧を養成する役目もあり、華厳をはじめ奈良時代の六宗に加え、天台宗と真言宗も入れた各研究所が設けられ、八宗兼学の学問所となり、多くの学僧を輩出しました。



大仏様に祈願をして、その周りを1周します。大仏殿の屋根に乗せられている以前の鷲尾が展示されています。木で作った形の上に銅板を貼り付け、その表面に金箔を貼っています。金色に輝く鷲尾は大仏殿の欠かせないシンボルと言えます。

大仏様の左には、虚空蔵菩薩が祀られています。虚空蔵菩薩とは広大な宇宙のような無限の智恵

と慈悲を持った菩薩で本当に有難い仏様です。その左横に南を護る增長天の頭部が祀られていました。大仏殿の諸仏再興の最後に残った四天王像は、寛政11年（1799）に広目天の御衣木（みそぎ、神仏の像を作るのに用いる木材）加持が行われ、その後、多聞天像とともに完成しましたが、持国・增長の二天は素木（しらき）の頭部のみが残りました。



左の隅には、西の方角を護る広目天が安置され、奥の中央には、創建当初の東大寺の伽藍の様子を50分の1に縮小・復原した模型が置かれています。大仏殿は現在のものに比べて東西（左右）に大きく、また100mに達する東・西両塔がそびえていたことが分かります。又、その横にも二つの大仏殿模型が置かれています。一つは、治承4年（1180）に平重衡の軍勢によって焼かれた後に鎌倉時代に再建された模型です。

もう一つは、永禄10年（1567）に三好・松永の兵火によって焼かれ後に、江戸時代の永禄6年（1709）に再建された模型で、この二つの模型は少し形が違っていることが、並んで置かれていることによって理解出来ました。時計回りに1周していると、北を護る広目天と多聞天像、東を護る持国天頭部があり、大仏様の東側には如意輪観音が祀られています。

如意輪観音は如意宝珠（靈験を表すとされる宝の珠）と輪宝（外敵手が六本あり、右ひざを立てる輪王座（りんのうざ）スタイルをしているのが特徴であると言われています。

大仏殿を出るとその前に賓頭盧尊者（びんずるそんじや）の木造が置かれています。賓頭盧尊者は仏弟子で、如来・菩薩以前の修行課程にある十六羅漢のうち、第一の聖者です。

説法に優れ、「獅子吼第一」と呼ばれましたが、釈迦にとがめられたほどの神通力の持ち主であったとも言います。賓頭盧尊者には種々の伝説があり、中国ではそれをもとに、聖僧として食堂（じきどう）に安置されました。日本ではその像を伽藍の前に安置して、病人が患っている箇所と同じ部分を撫でるとその病が消え、そのことから撫で仏とも呼ばれています。

大仏殿から東にある二月堂へ向かいますが、すぐ近くには、金色に輝く高さ23mの「相輪」がひときわ目立ちます。東大寺には8世紀半ば、100メートル級の巨大な東塔と西塔が建てられましたが、平安中期に西塔を焼失し、1180年には平清盛が五郎の重衡に源氏と連携し始めた南都の追討を命じ、焼き打ちで東塔も焼失し、再建するも落雷で焼失てしまいました。この相輪は1970年の日本万国博覧会に出展された七重塔の相輪で、万博終了後にこの地に移設されたものです。東大寺は全国の国分寺の中心である總国分寺で、それにふさわしい塔が必要でした。塔は本来、仏舎利を収める場所ですが、威容を誇示する意味もあり、塔は寺や地域の象徴でもありました。

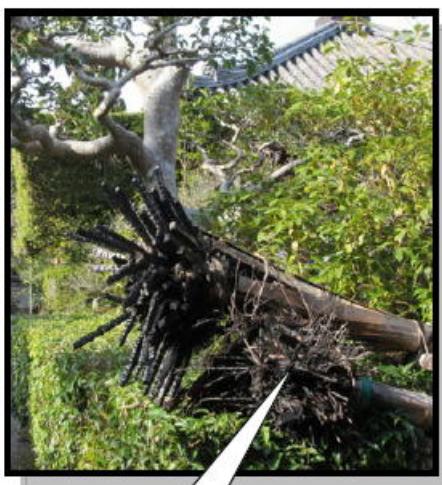


東へ坂道を登って行くと、国宝の鐘楼とその中の国宝の梵鐘が見えて来ます。この鐘楼は、鎌倉時代の東大寺復興に大きな足跡を残した重源上人を継ぎ、大勸進（人々に仏法を説き作善をなすように勧誘策進する職務）となった栄西（ようさい）禪師が承元年間（1207～1210）に再建したもので、大仏様にやや禅宗様的要素を加味した豪放な建物です。梵鐘は重さ26.6トンもあり、東大寺創建当初のもので、鐘声の振幅は非常に長く、日本の四名鐘（「姿（形）の平等院」、「声の圓城寺（三井寺）」、「銘の神護寺」、「勢の東大寺」）の一つです。



二月堂に来ました。古都に春を呼ぶ「お水取り」の名で知られる修二会は、このお堂で旧暦の2月に行われたことから、二月堂と言いますが、その前に小さな建物があり、それは重要文化財の「閼伽井屋」です。この阿加井屋は、修二会に際し、毎年3月12日（3日午前1時過ぎ）にこの屋内にある井戸より、本尊の十一面觀世音菩薩にお供えする御香水（おこうずい）（閼伽水）を汲む儀式を行うところです。

天平勝宝4年（752）に実忠和尚が二月堂で初めて修二会を行い、諸神を勧請した際、若狭国の遠敷（おにう）明神が献じたものであるところから「若狭井」とも呼ばれます。現在の建物は、13世紀初期に再建されたものだと思われます。



お水取り・松明

二月堂の舞台にあがると生駒山方面を遠望したり、欄干に残っている松明を転がした跡形を見て、北へ進むと「二月堂茶所」という休憩所があり中に入ります。その中には今年3月7日に使用された、竹の長さ6mで重さ40kgの通常松明と、3月12日だけに使用された、長さ8m重さ60kg籠の直径80cmという籠松明が展示されていて、松明を理解することが出来ました。

二月堂を後にすると、三月堂（法華堂）の前から南西に歩くと、東塔跡を見て池の中央に手鏡を置いたような形から名付けられた鏡池を経て南大門にやって来ました。国宝の南大門は高さが25mあり、日本国内で最大規模の巨大な山門です。南大門は、柱を貫通している「貫」があり、水平材を多用して構造を堅固にしていること、天井を張らずに構造材をそのまま見せて装飾としていることなどの「大仏様」の特徴を見せてています。南大門に関しては、「建築」のみどころのみならず、最大の名物としては門の左右に「金剛力士像（仁王像）」が設置されていることでも大変有名です。正面から見て門の左側には阿形像、右側には吽形像が安置されていますが、これらは鎌倉時代の天才的仏師（仏像を造る職人）である運慶が指揮をとり、快慶らとともに彫り上げたもので、門が完成した後、建仁3年（1203年）にわずか69日間の製作期間で造り上げられたと言われています。この2体の金剛力士像は、他の寺院の金剛力士像と少し違っています。それは両者が他の寺院のように正面を向いているのではなくて、お互いに向き合っていることで、両者が協力して東大寺を護っているからだと言われています。

その他には、余り気づかれないことは、南大門の裏手にユニークな「狛犬（石獅子）」がひっそりと佇んでいることです。この狛犬は制作時期が判明しているものとしては日本最古のものにあたり、作者は中国の職人であるとされています。

「なら・観光ボランティアガイド・朱雀」の人達の説明は全て終わり、11時半に全員が東大寺ミュージアム前に集合して、お別れの挨拶をしましたが、いつの日かこのガイドの人達と再会し、又お世話になりたいと思いました。

ここで解散となり、その後は東大寺ミュージアム内にある展示物に観覧の時間となりました。





モダンな建物で入口付近には東大寺の大仏の実物大の手のひら（縦横3m）のレプリカが展示されています。先ず右手の形は施無畏印と呼ばれ、手のひらを前に向けて「恐れなくてもよい」と相手を励ましています。そして左手の形は与願印と呼ばれ、手のひらを上に向けて「願いを叶える」ことを表わしています。尚、両手の中指だけを少し曲げているのは、特に右手は叩く形でないことを示しているからです。

東大寺ミュージアムは長い歴史の中で伝えられて来た国宝や重要文化財が数多く展示されていて、京都・宇治の平等院ミュージアム鳳翔館を思いおこさせました。

エントランスでは、聖武天皇が大仏さまに込めた思い、戦火からの復興など、東大寺の歴史を映像で紹介しています。そして最も小さな国宝と思われるのが、銀製鍍金狩獵文小壺です。

そして東大寺ミュージアムのパンフレットの表紙を飾っているのが、国宝・誕生釈迦仏立像及び灌仏盤で、両手で天と地を指し「天上天下唯我独尊」と唱えたという、釈尊の誕生時のエピソードに基づき、4月8日の灌仏会の本尊として制作されたというものです。

その他の仏像は、重文・千手觀音菩薩立像、国宝・日光菩薩立像、国宝・月光菩薩立像、国宝・金銅八角燈籠火袋羽目板（鉢子）、国宝・四天王（持国天・增長天・広目天・多聞天）立像、重文・釈迦・多宝如来坐像があり、重文の伎楽面や出土品の瓦等も展示されていました。

今日は、ガイドの人の案内で東大寺大仏殿を詳しく教えて頂き、又ミュージアムでの美しい仏像の数々を目にすることが出来、充実した講座を経験出来て、大満足な半日でした。



大阪府北部コミュニティカレッジ 2020年11月18日(水)

特別短期講座 「**再発見！何でも見てやろう**」

第6回目講座 大阪市立長居植物園・自然史博物館

池上 憲治 記

地下鉄御堂筋線長居駅の北東に広がる大阪市東住吉区にある長居公園は、大阪を代表する総合公園で、総面積 65.7ha の広さを誇り、広大な緑あふれる都会のオアシスとなっています。

園内は、スポーツ施設、植物園、自然園の 3 つのエリアに大別され、今日は、花と緑のと自然の情報センターや自然史博物館を含む植物園を訪問しました。

10時に34人の受講生が長居駅出口に集合すると早速、東にある植物園に向かいます。

大阪市立長居植物園に入って行くと、花と緑と

自然の情報センターの建物があり、その中のセミナー室にて、係の人から植物園のことを中心に説明を受けます。

昭和49年に開園した植物園は広さ 24.2ha で、甲子園球場6個分です。樹種は123科、1, 200種類、約61, 000本、専門園は11園という大阪を代表する植物園です。

園の植物の中で、現在の主役はコスモスです。10月31日(土)から11月23日(月・祝)までコスマスフェアが開かれています。23日にはコスモスの花摘み体験会があり、十万本のコスモスはそれで終了となります。

この園のコスモスの種類は10種類で、アポロ、カサノヴァ、カップケーキ、キャンパスイエロー、秋咲巨大輪、ダブルクリック、サイケ、キャンバスオレンジ、ピコティー、シーシェルがそれらです。濃い紫が秋咲巨大輪で、アポロ、サイケ、ピコティー、シーシェルは白地に紫色が乗った花です。カップケーキという品種は少し変わっています。花弁が結合したカップ状の花が特長の珍しいタイプのコスモスで、カップ状の花弁と一重咲きがバランスよく開花して楽しめる混合種だそうです。シーシェルは巻貝の花弁コスモスで、花弁のそれぞれが筒状になり巻貝の貝殻から連想されました。ダブルクリックはまるでダリアの様なコスモスで、八重咲きで豪華な印象とボリューム感があります。カサノヴァとカップケーキは、この植物園にあるのは白色のものだけです。キ



ヤンパスイエローとキャンバスオレンジはその名の通り、イエローとオレンジだけあります。次に、長居植物園の紅葉についての説明がありました。イロハモミジではなく、カキノキ、ケヤキ、ソメイヨシノ、トウカエ



デ、ナンキンハゼ、ニシキギ、ハナノキ、フウ、プラタナス、ラクウショウがそれらですが、葉の大小や形の違いで判断出来るようです。植物園の園内の説明もあり、中央にある大池の周りを反時計周りに回るのが良いようです。

説明終了後は、それぞれ園内を巡って行きます。東にあるライフガーデンでは現在コスモスが真っ盛りです。十万本が密集して植えられていて、楽園そのものです。23日(月・祝)に花摘み体



験会があり、全て無くなってしまう寂しく感じることでしょう。コスモス畑のすぐ東にはハーブ園があります。ハーブはもともと「草」とか「薬用植物」と訳されていますが、ここでは料理・ハーブティー・入浴・香り・染色等生活の中で楽しめるハーブを、種類ごとに、お互いが混じらないように鉢に植えたもの約100種類と、色々なハーブを群植した2種類の展示があります。

その北西の広大なバラ園でも赤や白のバラが咲いていて見頃を迎えていました。

その北のダリア園は道路の東側に沿って細長い敷地に約1000株が植えられていて、今が見頃で、黄色、ピンク、紫、オレンジと華やかな感じが楽しめました。植物園の北東の端のメタセコイア植物群、北西のアジサイ園、そしてその南にある大池を見て、西側のハナショウブ園を過ぎるとその南にはラクウショウがあります。ラクウショウ(落羽松)はスギ科の植物で、北アメリカ原産の落葉針葉高木です。湿地に生育する為、ヌマスギ(沼杉)の名前があります。湿地に生育するので、呼吸根が発達しています。気根(呼吸根)



については、根は地下だけではなく、



茎や葉からも生じ、地中の根の一部が地上に伸びだすこともあります。このように、空気中にある根をひっくるめて気根といい、その働きにともなって形や構造に特徴が現れます。ラクウショウは地中に横走する根から細胞間隔の多いこの呼吸根を地上に直立させ呼吸し、湿地にうまく対応して

います。植物園を反時計回りに一周すると、園の南にある自然史博物館に向かいます。花



と緑と自然の情報センターの東に自然史博物館がありますが、その間の空間には巨大なクジラの骨格が天井からぶら下げられています。

それはナガスクジラで名前をナガスケと言い、来館者の方からの公募で選ばれた名前です。この標本は、1990年4月8日に堺泉州北港に流れついた死体を、7年かかって骨格標本にしたものです。ナガスクジラは世界中

の海に住んでいますが、沖合を泳ぐことが多く、死体が流れ着いたり、陸に乗り上げたりした例はあまり多くありません。大阪の町は人工物で覆われていますが、このナガスクジラは、大阪の海もクジラが泳ぐような大自然とつながっていることを、私達に示しています。この骨格は全長19mあり、日本近海で採取されて展示されているクジラ類では、最大の標本です。

博物館の4つのテーマは、「身近な自然」「地球と生命の歴史」「生命の進化」「生き物の暮らし」で、この館ではとても詳しく展示されています。博物館に入館するとすぐナウマンホールがあります。博物館のシンボルマークにもなっているナウマンゾウの復元模型です。ナウマンゾウは、2万年前まで日本列島に住んでいたゾウで、日本の地質や化石を研究したエドムント・ナウマンにちなんで名付けられました。大阪平野の地下の地層から、ナウマンゾウの足跡や歯の化石が見つかっています。

又、3万数千年前の地層からは、ヒトが作った石器が発見されています。その頃の大阪平野には、ナウマンゾウの群れを狩るヒトが暮らしていたと思われ、大阪における、「自然とヒトの関わり」の始まりと言えます。ナウマンゾウと並んで鹿の模型もあり、ヤベオオツノジカと言います。絶滅した大型のシカの仲間で、巨大な角を持っていました。よくナウマンゾウと同じ所から化石が見つかります。その近くにサヌカイトが展示されています。サヌカイトの表面は白っぽくてざらざらですが、割



ると中はまっ黒で、大変鋭い割れ目が出来ます。石器時代の私達の祖先は、この割れ方を利用して、サヌカイトを材料にやり先やナイフなどの石器を作りました。サヌカイト(讃岐石)という名前は、この石が沢山見つかる香川県の古い地名(讃岐)をとつてつけられました。大阪では二上山の近くで見つかります。

ナウマンホールのある1階には沢山の展示物があり、大変詳しいので、大阪近辺での自然や地球の歴史について十分に学べるようになっています。

第1展示室と第2展示室があり、第1展示室のテーマは「身近な自然」で、1から10までに分けられています。

1. 港で見つかる外来生物
2. 都市の自然、町の自然
3. 村の自然
4. 里山の自然
5. 照葉の森
6. 失われてゆく環境と生き物
7. 大阪の林と昆虫
8. 先史大阪人の食べ物
9. 外来生物の影響
10. 大阪湾と生物です。

第2展示室では「地球と生命の歴史」について11から18までです。

11. 大阪平野のおいたち
12. 大氷河時代
13. 人類の時代
14. 大阪層群
15. 哺乳類の時代
16. 和泉山脈
17. 恐竜とアンモナイトの時代
18. 古生代の海と森

1階の展示を見終わると2階へ進みます。

2階には第3から第5までの展示室があります。

第3展示室では19から25までが「生命の進化」という内容です。

19. 種のたん生
20. すみ場所をひろげる
21. 生物どうしのつながりと進化
22. 地球は虫でいっぱい
23. ところ変われば虫変わる
24. 海は生命のふるさと
25. わたしたちはどこから

第4展示室は「自然のめぐみ」がテーマです。

26. 食用植物とそのふるさと

第5展示室は「生き物のくらし」で27から38まであります。

- 27. 種が違えば、生き方も違う
- 28. 果報は寝て待て
- 29. 新天地を求めて
- 30. 食う、食われる
- 31. 取り合う関係
- 32. 寄生と共生
- 33. 三角関係
- 34. 生き物が生み出す住み場所
- 35. 様々な環境を行き来する生物
- 36. さらに遠くへ旅する生き物
- 37. つながって成り立つ自然
- 38. 人の暮らしとの関わり

実際に様々で興味深く展示されていて、知れば知るほど真剣に観察するようになり、又いつか別の機会にも訪問したくなるような内容でした。

最後に、花と緑と自然の情報センターを経て終了となります。そこには「大阪の自然誌」として、大阪の海、川、平野丘陵そして三方をとりまく山々について、そこで見られる生き物や地層、岩石を展示し、その地域の特徴が示されています。今の季節の植物は少し限られた種類の植物だけが華やかに彩られていきましたが、別の季節に訪問すれば、更なる魅力が得られる植物園であると確信しています。



黄金の絨毯

大阪府北部コミュニティカレッジ 2020年11月4日(水)

特別短期講座 「再発見！何でも見てやろう」

第4回目講座(1) (ナムのひろば音楽会)

池上 憲治 記

今日は、受講生約40人が大阪府池田市石橋にある「ナムのひろば」文化会館にて、音楽会に参加しました。

◎「ナムのひろばとは」

「ナム」というのは、インドの言葉で「尊敬する」という意味です。インド人は今も「ナマステ」とあいさつしています。「ナマス(ナム)」と「テ(あなた)」で、「あなたを尊敬する」という意味になりますが、これを言い換えると「あなたは敵ではなく、仲間として受け入れます」ということで、心が通い合っている状態を指します。要は「ナム(ナマス)」は「お互に、敬う心で一つになる」ことです。

本日講演されるのは、ヴァイオリン演奏が大阪音楽大学の松田淳一先生で解説と演奏を、ピアノ演奏は松田淳子先生の2人でした。今日のテーマは「音楽はどのように利用してきたか」(歴史と上手に付き合う方法)という内容です。言い換えると、人にとって音楽はどの様に影響するかを歴史的な事実に基づいて解明して、如何に音楽が身近で大事なものなのか理解することだという事です。

治療、宗教、戦争等の人類の歴史の場面で、多種の音楽が影響を与えて来たと言えます。治療では、ギリシャ時代には音楽を聴くことによって本格的な精神療養が行われ、医者は音楽家であったと言えます。又、睡眠、恋愛、飲酒等によってドーパミンは、「意欲」「運動」「快楽」に関係する神経伝達物質で、「気持ちが良い」「心地良い」と感じると出るといわれています。



G線上のアリア(ヨハン・セバスチャン・バッハ作曲)はその好例とのことで、ここから10曲ほど先生の演奏を聴きました。

宗教では、賛美歌のアーメイジング・グレイス(驚くべき恩寵(おんちょう)の意味)が有名で、カラオケ曲にも入っています。日本の場合は、縄文時代から石笛が神道の楽器として使われていたそうです。

戦争の時に愛国心をおこさせ、勝利して凱旋した時には、チェコの国民的作曲家ベドルジハ・スマタナのモルダウ(交響詩「我が祖国」から)が有名です。この曲は、水の流れを表すだけでなく、スマタナのチェコへの愛国心が込められています。この曲は短調で始まっていますが、2つの水源の「川」が合流して「河」になるあたりから、長調で華やかなメロディーになります。これは、チェコ民族の独立と勝利を表していると言われているのです。

庭の千草(アイルランド民謡)や赤とんぼ(山田耕作)のように、音楽は同じ曲でも何度も感動を与え



[画像クリックで動画再生]

G線上のアリア(ヨハン・セバスチャン・バッハ作曲)はその好例とのことで、ここから10曲ほど先生の演奏を聴きました。

宗教では、贊美歌のアーメジング・グレイス(驚くべき恩寵(おんちょう)の意味)が有名で、カラオケ曲にも入っています。日本の場合は、縄文時代から石笛が神道の楽器として使われていたそうです。

戦争の時に愛国心をおこさせ、勝利して凱旋した時には、チェコの国民的作曲家ベドルジハ・スマタナのモルダウ(交響詩「我が祖国」から)が有名です。この曲は、水の流れを表すだけでなく、スマタナのチェコへの愛国心が込められています。この曲は短調で始まっていますが、2つの水源の「川」が合流して「河」になるあたりから、長調で華やかなメロディーになります。これは、チェコ民族の独立と勝利を表していると言われているのです。

庭の千草(アイルランド民謡)や赤とんぼ(山田耕作)のように、音楽は同じ曲でも何度も感動を与えるという素晴らしい効能があります。

音楽療法に「同質の原理」があります。それは実際にこころの向かうところは逆で、悲しい時には悲しい曲を聞くと、一時的には悲しくなりますが、次第にこころの落ち着きを取り戻し浄化ていきます。

このように自分の気持ちと同化した音楽を聴かせ、気持ちを代弁するという行為が音楽療法にも応用されています。例えば、失恋の時にはカルメン幻想曲(P. サラサーテ)に代表されるようなタンゴの曲が効果的にされていて、暗い音楽から徐々に明るい音楽にして行き力づけることが出来るということです。



J. ウィリアムス作曲の映画「シンドラーのリスト」テーマ曲は、オスカー・シンドラーがユダヤ人を救済したという実話に基づいて作曲されました。第二次世界大戦時にドイツによるユダヤ人の組織的大量虐殺(ホロコースト)が東欧のドイツ占領地で進む中、ドイツ人実業家オスカー・シンドラーが 1100 人以上のポーランド系ユダヤ人を自身が経営する軍需工場に必要な生産力だという名目で絶滅収容所送りを阻止し、その命を救った実話を描いています。

明るい曲という点では、アメリカの思い出(H. ヴェータン)や奥様お手をどうぞ(アルフレッド・ハウゼ)、魅惑のワルツ(F. マルケッティー)、マイフェアレディー(A. プレヴィン)等の音楽は薬品と異なりフィーバックが無く安全で、人の心に沁み込んで、力づけ元気の源と言えます。



[画像クリックで動画再生]

今日は、松田先生2人による楽器演奏と音楽の歴史や効能についての興味深い話に受講生は皆満足したようで、今更ながら生演奏の素晴らしさを体感できた講座でした。

* * * * *

大阪府北部コミュニティカレッジ 2020年11月12日(木)

特別短期講座 「再発見！何でも見てやろう」

第4回目講座(2) (ナムのひろば音楽会)

池上 憲治 記

今日は、受講生約40人が大阪府池田市石橋にある「ナムのひろば」文化会館にて、音楽会に参加しました。

今日のテーマはモンゴル音楽です。講師は東京音楽大学講師でモンゴル伝統芸術協会会長等を兼務する、M. サウガゲベル先生 です。又、この先生は日本ホーミー協会会長でもあります、ホーミーとは

あまり馴染みのない言葉で、喉歌(のどうた)とも言い、喉を詰めた発声から生じるフォルマント(時間的に移動している複数のピーク)を利用した、笛のような音などを特徴とする声を用いた特殊な歌唱法です。

一人で低音と高音の二つの音を同時に歌うモンゴル国の西部で発祥した伝統芸術で、自然界の様々な音(水のせせらぎ、山に響くこだま、鳥たちの声等)を模倣している芸術ともいわれます。

音の高さや使う部分によって、高音ホーミー、低音ホーミー、鼻ホーミー等多くの種類に分けられます。馬頭琴やトヴェール、ヨーチン等と一緒に歌われることが多くあります。又、ユネスコ無形文化遺産に登録されています。

今日のプログラムは下記の通りです。

- 1.《ホーミー》 チンギス・ハーンの賛歌 モンゴル伝承曲
- 2.《リンペ》 モンゴルの四季 モンゴル民謡
- 3.《伝統的な音楽》 口琴
- 4.《馬頭琴》 ジョノン・ハル モンゴル伝承曲
5. モンゴルの紹介スライド
- 6.《伝統的な音楽》 ツオール
- 7.《ホーミー》 33ゴビの賛歌
- 8.《リンペ》 黒毛の駿馬

～休憩～

- 1.《馬頭琴》 荒城の月
- 2.《馬頭琴》 ラクダの走り
- 3.《リンペ》 キャラパンの青年
- 4.《リンペ》 昴
- 5.《リンペ》 川の流れのように
- 6.《ホーミー》 チャンドマニの故郷
- 7.質問コーナー

以上でした。

又、楽器の説明もありました。



「リンペ(横笛)」

モンゴルの民族楽器の中で最も歴史のある楽器の横笛リンペです。吹き口と6つの指穴、2つの音の出る穴を持ちます。曲の最初から最後まで息継ぎの間をあけずに吹き続けるという奏法もあります。

その奏法は2010年にユネスコ無形文化遺産に登録されました。3種類だったリンペを2010年に今日の講師であるサウガゲベル氏が14種類まで増やしました。

「ツオール」

木製の縦笛ですが、ホーミーを歌いながら吹くのが特徴です。指穴の押さえ方も独特です。

「モリンホール(馬頭琴)」

馬の頭の部分の彫刻がついたモンゴル国の弦楽器です。馬の尾の毛で出来た弓で弾いて演奏します。かつては共鳴箱は様々な材料で作られていて、皮が張られた楽器も多かったが、現在は木の共鳴箱が一般的です。ヴァイオリンとチェロの中間の音域を持っています。ユネスコ無形文化遺産に登録されています。

「トヴェル」

指ではじいて音を出す楽器で、ホーミー、マグダールの伴奏のみに使われます。この楽器には色々な種類があり、その頭の部分についている動物によって名前が変わり、白鳥トヴェル、山羊トヴェル等があります。

「口琴」

モンゴル国の民族楽器で、口にくわえて弁を震わせながら、口の中の空気や舌の高さを変化させて色々な音を出します。鉄製と竹製の 2種類があります。

講師の人は色々な楽器を使って演奏します。口琴は口にくわえて指で一端をはじくとハープのような響きを持った音が出ていました。

馬頭琴の頭は馬の頭蓋骨から出来ていて、1本の弦は馬の尻尾 120本から出来ているとのことで、モンゴルの草原を走る馬を想像しました。

モンゴル国の紹介では、先ずパワーポイントに国旗が写しだされ、その意味についての説明がありました。国旗は赤・青・赤で色分けされていて、右の赤は勇気を表し、青は不戦を、そして左端は赤地に昔の文字のゾンボという黄色の文字が記されています。そのゾンボの図形は上から、火・地球・水・太陽・月・陰陽を表して、まるで日本の五輪塔のようです。

モンゴル高原で活動した遊牧民モンゴル人は、13世紀初めにチンギス=ハンがモンゴル帝国を建国し、西アジア・ロシアから中央アジア、中国大陸をふくむ大帝国を建設しました。

その後は縮小しましたが、現在は日本の約4倍の国土があり、人口は21部族で、約330万人(2019年現在)で、約半数が首都のウランバートルに住んでいるということです。尚、文字は日本と同様に縦文字と横文字があるそうです。遊牧民のゲルはモンゴル高原に住む遊牧民が使用している、伝統な移動式住居のことです、日本では、中国語の呼び名に由来するパオ(包)という名前で呼ばれることが多いです。簡単に建てたり解体出来るそうで、家畜の食べる草を求めて、移動して行き、移動先では井戸を掘って飲み水にします。食べ物は、チーズや焼うどんのようなツォイワンが主で、肉や野菜も多いようです。牛糞は肥料になります。

ナーダムとは、モンゴル国において、年に数回行われる国民行事である「民族の祭典」です。ブフ(モンゴル相撲)・競馬・弓射の3つの競技が行われます。特に競馬はモンゴルでは子供達がいつも小さい時から馬に乗っているので皆得意なようです。

今日は、モンゴル音楽ということで、講師の人の優れた楽器演奏による多くの曲を堪能し、モンゴル国の説明も十分あり、時間を忘れるような素晴らしい体験でした。





大阪府北部コミュニティカレッジ 2020年10月21日(水)

特別短期講座 再発見～何でも見てやろう～

第4回目講座 (京都市京セラ美術館)

池上憲治 記

京都市美術館は、京都市左京区岡崎の岡崎公園にある美術館で、1933年に開館し、公立美術館として東京都美術館に次ぎ、日本で2番目に開館しました。



京都市美術館本館は、現存する日本の公立美術館の中で最も古い建築です。創建は1933年で、近代的な鉄筋コンクリートビルの頂部に、中世の城のような瓦屋根を配す、いわゆる帝冠様式を代表する建築です。以来、第二次世界大戦をまたいで80年余り、京都市民をはじめ多くの人の記憶に深く刻まれてきました。

今回訪問時の展覧会は「コレクションルーム 秋季」と「京都の美術 250年のゆめ総集編」の2展覧会です。

尚現在、2017年4月からリニューアルのために休館になっていた京都市美術館が、命名権を得た京セラの名前を冠した京都

市京セラ美術館としてリニューアルオープンしています。

午前10時前には、私達受講生36人と一般の参観者が数多く入り口前に並んで、人気の高さが伺えます。10時に入館して、私達約30人は2班に分かれて2つある展覧会の1つの部屋に入って行きます。私は先ず「コレクションルーム 秋季」の部屋に入りました。

リニューアルオープンを機に新設したコレクションルームでは、京都の四季に合わせた年4回の展示替えによって、日本画の名品を中心に、季節感に溢れた作品を数多く展示しているそうです。今の秋季は9月26日から11月29日まで、本館南回廊1階で展示されていて、内容も多岐に亘っています。

秋を奏でる 5点

秋の景1 20点

竹内栖鳳の芸術 15点

版画・彫刻・工芸の名品 15点

「美人画」 12点

肖像を描く 8点

秋の景2 6点

現実を超えて 4点

線を引く、画を作る 5点

工芸にみる秋 10点

京都の版画と書 2点



合計102点の力作です。竹内栖鳳のコーナーの15点については写真撮影が認められていました。

京都画壇を代表する画家竹内栖鳳の作品は、この美術館には素描、下絵、書などを含め計200点が所蔵されています。今回は2016年に重要文化財に指定された《絵になる最初》(展示期間:9月26日～10月11日)を含め、「棲鳳」と号していた初期作から晩年作まで緩急をつけた筆致の妙で、対象の形のみならず取り巻く空気の湿度までも表現する傑出した描写力に加え、自ら俳句も嗜み、既知に富んだ取り合わせを軽妙に絵画化する優れた構想力もみどころです。

「年中行事」は1886(明治19)年頃の作品で、風景と人物を描いた掛け軸です。

「源義家」は明治20年代の肖像画で掛け軸です。
「池塘浪静」は明治20年(1887)の風景画です。
「雨」は明治44(1911)年の暗い雨を表しています。
「潮汐永日」は大正11(1922)年の海岸の絵です。
「驟雨一過」(しゅうういつか)は、にわか雨が通り過ぎた一刻。柳の枝にとまった鳥は、一羽は羽繕い、一羽は一声鳴いている。濡れた鳥の羽根や青く瑞々しい柳葉、湿った大気や煌めく陽光が、たっぷりと水を含ませた筆で描かれ、移ろいゆく自然を情感豊かに伝えているという紙本墨画淡彩軸で、昭和10(1935)年の作品です。
「清閑」は昭和10(1935)年頃の作品で犬を描いた掛け軸です。
「冬瓜にねずみ」は掛け軸で、大きな冬瓜の上に小さなねずみが乗っている絵です。
「うな辺」は昭和1(1926)年頃の大きな鯛を描いた掛け軸です。
「水村」は昭和9(1934)年の濃淡を生かした風景画です。
「溪流(未完)」は2点あり、昭和初期の濃淡のある風景画です。
「家鴨(未完)」は昭和11(1936)年頃の絵で、淡い家鴨の絵です。
「コレクションルーム 秋季」の中で特に代表的な作品として、竹内栖鳳の「絵になる最初」が有名だそうです。大正2(1913)年の絹本著色で、女性画です。
「コレクションルーム 秋季」を全て観覧し終わると対面にある「京都の美術 250年のゆめ総集編」の方へ進みます。

「京都の美術 250年のゆめ総集編」は明治維新から100年前の江戸後期から現代にかけて、日本画の代表作家を中心に、同時代に活躍した工芸家や書家、明治期に登場した洋画家、彫刻家、版画家、さらには戦後の現代美術の新鋭作家を加えて、「京都の美術」の250年の歴史を彩った名品を三部構成で紹介します。10月10日から25日までの間に展示されるのは下記の通りです。

第1部 江戸から明治へ:近代への飛躍

江戸後期の京都では、異端の画家伊藤若冲や曾我蕭白をはじめ、文人画家の与謝蕪村、新登場した写生画の円山応挙、四条派の始祖・吳春、個性派である長沢芦雪らが活躍していました。この後、幕末から明治にかけて、新しい時代を迎えた京都の美術・工芸の発展を「江戸から明治へ」と連続的に回顧します。

第1部は1から5まであります。

1. 江戸後期の絵画・書 5点
2. 江戸後期の工芸 7点
3. 明治の日本画・書 7点
4. 明治の洋画 5点
5. 明治の工芸 6点



第2部 明治から昭和へ:京都画壇の隆盛

明治後期から昭和初期、新しい日本画の創造に向けた活動が展開されました。竹内栖鳳を中心とした京都画壇では、大正期には国画創作協会が結成され、黄金期をむかえます。また明治後期には浅井忠が、京都の洋画壇を確立します。工芸界でも浅井は海外思潮をもたらし、大正期には神坂雪佳が日本的な意匠を普及させる中、芸術としての工芸の道が切り開かれました。

第2部は1から4まであります。

1. 大正・昭和の日本画・書 22点
2. 大正・昭和の洋画・彫刻 14点
3. 明治末から大正の工芸 20点
4. 昭和初期の工芸 15点

第3部 戦後から現代へ:未来への挑戦

戦後の激動の中、日本画、工芸、書の伝統が問い直され、1960年以降、現代美術と呼ばれる潮流が生まれます。日本画では、新団体の結成と共に新しい日本画表現が探究されました。工芸でも、伝統の継承と新たな表現との葛藤から、使用目的を排した作品(オブジェ)が探究されます。洋画でも、社会的な主題が指向され、書には抽象美術との関係から前衛書が登場しました。

第3部は2階会場で1から6までです。

1. 日本画 1940年代～1980年代 27点
 2. 洋画 1940年代～1970年代 16点
 3. 彫刻・版画 1950年代～1970年代 7点
 4. 工芸・書 1950年代～1980年代 26点
 5. 現代美術 1970年代 8点
 6. 現代美術 1980年代以後 19点
- 合計204点の多彩な展覧会でした。

今回の一般的に主な展示作品としては10点があるようです。

1. 与謝蕪村・重要文化財「鳶・鴉図」江戸時代
2. 円山応挙・筆重要文化財「藤花図屏風」1776年
3. 吳春・重要文化財「白梅図屏風」1789～90年頃
4. 上村松園・「娘」1926年
5. 神坂雪佳・「源氏夕顔蒔絵棚」1917年頃
6. 浅井忠・「梅図花生」1902～1907年
7. 北大路魯山人・「看板「柚味噌」」1914年
8. 土田麦僊・「大原女」1927年
9. 北脇昇・「クオ・ヴァディス」1949年
10. 八木一夫・「ザムザ氏の散歩」1954年

「京都の美術250年の夢」の展覧会の方は著名な作家が多く、人気の高さが伺い知れました。

私個人としては、美術とは、対象となる美しいものを更に美しく見せる技術だと思います。抽象画や印象画等は作者にとっては美しいものだとは思いますが、主観的な思いが強く、それに対して、例えば、木島桜谷、上村松園、伊藤若冲等に代表されるような精密画の美しさは、万人が認めるところではないでしょうか？

今回は特に上村松園の「娘」が一番人気のようでした。



京阪・石清水八幡宮駅前にある観光情報ハウスの前に10時に34人の受講生が集合して、そこの観光ガイドの人5人で、各班に分かれて、石清水八幡宮まで案内してもらいます。東高野街道の標識の南へ行くと、石清水八幡宮一ノ鳥居があります。一ノ鳥居の扁額「八幡堂」の文字は、平安の三蹟・藤原行成(他の2人は小野道風・藤原佐理(ふじわらのすけまさ))の書を寛永の三筆・松花堂昭乗(他の2人は近衛信尹(このえのぶただ)・本阿弥光悦)が書写したもので、「八」の字が神使の双鳩になっています。



一ノ鳥居



石柱

その鳥居の前の道を少し西へ行くと、曹洞宗・神應寺の山門が見えます。神應寺は貞觀元年(860)に石清水八幡宮を開いた行教が創建し、重文の行教律師坐像や、豊臣秀吉の衣冠束帶の像を安置しているようですが、今日は時間が無くて、山門を拝むだけになりました。

すぐ南には五輪塔(別名は航海記念塔)があり、高さ6mにもおよぶ日本最大級の重文の石造塔です。摂津尼崎の商人が中国宋との貿易の帰途、石清水八幡宮に祈って海難を逃れ、その恩に報いるため建立されたと伝えられる。航海の安全を祈って参詣され、航海記念塔とも称されています。



五輪塔

すぐ東にある頓宮殿に向かいます。回廊に囲まれた一画を「頓宮(とんぐう)」といい、毎年9月15日に勅祭「石清水祭」が行われます。頓宮とは、仮の宮という意味で、その時に本殿より御神靈が遷される御旅所となります。

石清水八幡宮頓宮の東を流れる放生川(大谷川)に架かる橋は、中央がアーチ状に盛り上がり大きく半円を描いた形はたいこ橋で、安居橋(あんごばし)と言い、朧月として八幡八景の一つになっています。現在は石清水祭(放生会)の舞台として親しまれています。

西にある高良(こうら)神社に進みます。高良神社は石清水八幡宮の摂社で高良玉垂命(こうらたまたれのみこと)を祀ります。豊前国(現大分県)宇佐八幡宮より八幡大神を勧請した行教和尚が、貞觀2年(860)6月15日に社殿を建立したと伝えられ、吉田兼好の「徒然草」にもその名が見えます。

放生川に沿って南へ少し歩くと相槌神社があります。社伝によると、平安時代中期の伯耆国大原の刀工・伯耆安綱(ほうきやすつな)が刀を打っていると神が降臨し、槌を打ち合わせた(相槌をなす)とあり、このことから相槌神社と呼ばれるようになったそうです。安綱はこの地で宇迦之御魂と共に、山ノ井の水を用いて名刀「髭切」と「膝丸」を打ったとされます。山ノ井は八幡五水にも数えられる名水で現在も枯れることなく湧き出ています。

そこからは、広い表参道の七曲がりを登って行きます。しばらく登ると大扉稻荷社に着きます。その昔、このあたりには狐の住む穴があって、柴草を刈りに来る人々にいたずらをするので、小祠を建てて崇めたという伝説が残っています。

その向かいの山側には「影清塚」と手水鉢があります。ここは、かつて、瀬織姫を祀る祓谷社があり、6月と12月の大祓では、昔、人形を流す祓いの行事が行われ、参拝人もこの清水に「姿を清める所」という意味で、手水鉢はその名残を留めているとのことです。

ここで表参道と別れ、中参道を登って行きます。すぐに松花堂跡が見えて来ます。「松花堂弁当」の名の由来となった当宮の社僧・松花堂昭乗の晩年の住居・草庵跡地です。

そこから北方向に中参道を登って行くと石清水井と石清水社に着きます。それらは京都府指定文化財になっていて、冬に凍らず夏に涸れない靈泉「石清水」が湧き出る当宮の名の由来となった場所で、創建以前の起源に遡ります。石清水八幡宮の東総門近くに伊勢神宮遥拝所があります。「石清水八幡宮と同様、皇室の祖神を祀る伊勢神宮を拝する場所」ということです。

ついに南総門前の広場に到着しました。それから、いくつかの史跡を巡ります。神苑でひときわ目立つ建物が「涌峯塔(ゆうほうとう)」で、神職の使用する笏(しゃく)や冠のような形をしています。涌峯塔は単なるモニュメントではなく、給水塔の役割を持っています。山上では水圧が低いため、一度ポンプで塔の高いところに上げ、落下する水の勢いを利用して各所に配水しています。南西の一画にエジソン記念碑があります。西暦1879年にトマス・アルバ・エジソンが灯火の革命ともいえる炭素白熱電球を発明しこの石清水八幡宮境内に生えている竹が電球の命ともいえるフィラメントの材



手水舎

料として最も適していることを知り電球発明の翌年から十数年もの長い間この竹を使って沢山の炭素電球を造り世界の人々に電灯のありがたさを知らされました。

三ノ鳥居にきました。三ノ鳥居は、南北朝が統一まもない応永7年(1400)に建てられましたが、その後幾度か台風で倒れ、現在の鳥居は、昭和37年(1962)に再建されたものです。三ノ鳥居の本殿寄りに自然石が露出している部分があり、一つ石と言います。かつては馳馬や競馬の出発点であり、「勝負石」とも呼ばれる勝ち運の石で、お百度参りの地点もあります。その参道を北にある本殿に向って歩いて行くと途中に書院石庭があります。その庭は京を代表する名作庭家・重森三玲による枯山水の庭であり、この宮の海洋信仰に因み海洋が表現されていて、石庭の東南門には鎌倉期の石灯籠が立っていて、この宮にある450基ほどの石灯籠のなかで唯一、重要文化財になっています。

11時半からは本殿への昇殿参拝の時間となり、神官の人の案内で本殿を紹介してもらい、又祈祷もあり、厳かな雰囲気に包まれました。石清水八幡宮の御祭神は三柱です。中御前は第15代の応神天皇(別名は八幡神)を、東御前にはその母で、第14代仲哀天皇の后である神功皇后を、そして西御前には女神である比咩大神(ひめおおかみ)を祀っています。創建以来、都の裏鬼門(西南の方角)を守護する王城鎮護の神、伊勢神宮に次ぐ国家第二の宗廟として皇室の御崇敬特に篤く、また武運長久の神として清和源氏をはじめ全国の武士が尊崇を寄せてきました。2016年国宝に指定された御本殿・幣殿(へいでん)・舞殿(ぶでん)には欄間があり、約150点にも及ぶ左甚五郎作の精巧な彫刻が見事です。 石清水八幡宮の神様である“八幡大神”は、もともと九州・宇佐神宮の神様で“海の神様”だったことから、海を思い出してもらえるように龍宮城を模した極彩色の社殿に完成されています。石清水八幡宮は宇佐八幡宮等と共に、八幡造になっています。それは切妻造・平入りの建物が前後に二棟並ぶ形で、後ろの建物を内殿前の建物を外殿と呼び、横から見るとM型になります。このように前後に建てた建物を繋いで内部を広く使う方式は、仏堂にも用いられる形式です。



御社殿

外殿は昼間に神様が出坐し、内殿は夜に御休みになる部屋です。その外殿と内殿の軒に接する谷間には金属製の樋を渡して 雨水を受ける構造になっていますが、その樋は長さ22mあり、あの織田信長が天正8年(1580)に造らせた黄金の樋で、八幡宮に万一のことがあれば、その金を使うようにと伝わっています。本殿の中を欄間に沿って巡って行くと供花神饌(きょうかしんせん)が飾られていました。供花神饌とは、古代染めの和紙で作られる造花で三柱に対してそれぞれの神に奉納されました。今年は9月15日の石清水祭は神職による神事にのみ行われその他の行事は中止されましたが、その時の供花神饌はまだ残されて展示されていました。

本殿西門の蟇股部分に、琵琶の木にぶらさがり木の実をくわえる一匹の猿の彫刻があります。実はこの猿、一説には伝説の名工・左甚五郎の作といわれ、数ある八幡宮の彫刻のなかでもとりわけ秀逸な作品のため、ある日、猿に魂が宿り、夜になると蟇股から抜け出して山麓の畠を荒らすので、右目に釘が打ちつけられ、それ以降猿の悪さがなくなったという逸話が残っており、通称「目貫きの猿」と呼ばれています。その実の形から「神楽鈴」が作られたという説もあります、一円硬貨の表面に描かれていますおがたまの木に沢山の一円硬貨が貼り付けられていました。

本殿外側の北東の角には鬼門封じが切られています。牛の角を持ち、虎の皮を身にまとった鬼が来るといわれる丑寅の方角「鬼門」(東北)を封じるために、社殿の石垣を切り取った造りになっています。



楠木正成の楠

本殿をぐるっと囲む塀は信長塀と呼ばれ、安土桃山時代に織田信長が寄進した塀で、織田信長が好んで採用した様式といわれ、瓦と土を幾重にも重ねることにより、鉄砲の銃撃や耐火性、耐久力に優れていたとされています。信長塀で囲まれた壁の南西に、楠木正成の楠があります。建武元年(1334)に楠木正成が必勝祈願参拝の際に奉納したと伝わる樹齢700年にせまる御神木で、京都府指定天然記念物に登録されています。

本殿の拝観は全て終了し、南総門から外に出て、反時計周りに北本殿の拝観は全て終了し、南総門から外に出て、反時計周りに北側に向かいます。途中、東総門の東側を通りますが、そこに細橋(ささやきはし)というのがあります。それは、ささやくという言葉の語源になっていて、石清水井の源流が通るため

に渡らずとなっている橋だそうです。

更に北へ歩くと男山山上展望台に着き、東から北へかけての八幡市内を中心にはるか山崎の天王山まで遠望出来る素晴らしい光景市内を中心にはるか山崎の天王山まで遠望出来る素晴らしい光景です。その近くにある男山ケーブル山上駅からケーブルで男山の麓にある男山ケーブル駅までケーブルで下山するとあっと言う間に到着し本日の予定は全て終了しました。

今日一日、観光ガイドの人に案内して頂き、石清水八幡宮が昔から初詣の貴重な神社であり、最近国宝にも指定されたことをみてもその重要性が理解出来、八幡宮の大部分の個所を訪問出来た。

世界一を誇る明石海峡大橋を主体に、本州四国連絡橋の建設に使われた世界最高水準の架橋技術の広報の場として設置したサイエンスミュージアムがあります。パネル・模型・实物模型、映像を駆使して技術を紹介し、空中には長さ40mの風洞(風の流れを再現し、観察・検証・計測を行う装置)模型があり、3D立体映像による明石海峡大橋等の海洋架橋技術の数々を余すところなく体験しました。

JR舞子駅前には受講生約30人が集合して、すぐ南にある橋の科学館前まで進み、そこで2つのグループに分かれて、科学館と近くにある孫文記念館にそれぞれ向かいました。



孫文記念館は明石海峡大橋のすぐ東の海峡に面した素晴らしい環境下にあります。

孫文記念館(移情閣)は、中国の革命家・政治家・思想家である孫文(号は中山、又は逸仙、1868~1925年)を顕彰する日本で唯一の施設で、1984(昭和59)年に開設されました。

この建物は元々神戸で活躍していた中国人・呉錦堂の別荘「松海別荘」を前身としていて、1915(大正4)年に、その別荘の東側に八角三層の楼閣「移情閣」が建てられました。

外観が六角に見えることから、地元では「舞子の六角堂」として親しまれて来ました。孫文と「松海別荘」(移情閣)の関わりは、孫文が1913(大正2)年に来神した時、神戸の中国人、経済界有志が開いた歓迎の昼食会の会場になった時に始まります。

その後、1983(昭和58)年に兵庫県が「移情閣」を管理していた神戸華僑總会から寄贈を受け改修を行い、1984年に孫文生誕の日に「孫中山記念館」として一般に公開されました。

1993(平成5)年には「兵庫県指定重要文化財」に指定され、1994年に明石海峡大橋の建設とともに一旦解体され、西南200mの現在地に移転し、2000年4月に完成しました。

2001年に移情閣は国の重要文化財に指定され、2005年に「孫文記念館」と改称され、日本や神戸と孫文の関わりを中心に呉錦堂の生涯や移情閣の変遷等に関する展示が行われています。

館内の展示内容は6つあります。1.は孫文の生涯で、広東で生まれ、北京で亡くなるまでの孫文の革命生涯や中山陵、「國父」の呼称、「民主革命の偉大な先駆者」という評価の由来が紹介されています。



次に「橋の科学館」に向かいます。館内に入ると館長から詳しい説明があり、この明石海峡大橋がいかに素晴らしい橋であるかを力説されます。色々な展示パネルについての館長の説明は分かり易く、充分理解することが出来ました。各コーナーは13あり、1. 本四連絡橋の紹介、2. 橋の設計、3. 橋の建設(下部工)、4. 橋の建設(主塔)、5. 橋の建設(ケーブル)、6. 橋の建設(補剛

桁)、7. 360°VR体感コーナー、8. 橋の保全技術、9. 世界の橋・日本の橋、10. 明石海峡大橋40mの風洞実験模型、11. 3Dシアター・ギャラリー12. ミュージアムショップ、13. くつろぎのスペースとありました。

明石海峡大橋は、兵庫県神戸市と淡路島の間の明石海峡に架かる、橋長 3,911m、中央支間長 1,991m の世界最大の吊橋です。明石海峡大橋は、本州と四国を、道路と鉄道(瀬戸大橋のみ)で繋ぐ本州四国連絡架橋事業の一環として建設されたもので、1988 年(昭和 63 年)5 月に現地工事に着手し、およそ 10 年の歳月をかけて 1998 年(平成 10 年)4 月に完成しました。

館長の説明で、その間に死亡者はゼロであったということが素晴らしいことです。又、私もかつて明石海峡大橋の下でタイ釣り船に乗ったことがあります、強風に加えて潮の流れが大変速いことも有名です。事前の緻密な計算と、用意周到な準備、そして不撓不屈の精神で、見事に安全で美しい吊り橋が建設されたことは、絶賛に値するところです。

橋の科学館での説明が終ると、明石海峡大橋のごく一部を散歩するという、舞子海上プロムナードに進みます。世界一のつり橋「明石海峡大橋」の神戸市側に添加施設として同時施工され 1998 年 4 月 5 日に開設された舞子海上プロムナードは、海面からの高さ約 47m、陸地から約 150m、明石海峡へ突出した延長約 317m の回遊式遊歩道です。



海上プロムナードへは1階からエレベーターに8階で降りて南の海へ向かって歩いて行きます。左右には瀬戸内海が広がり、雄大な気分に浸れます。通路の所々には、透明なガラスが床にあつて恐怖心をあおります。そのガラスの上を歩くのは安全だとは思いますが、ガラスも長年踏まれて耐久性が落ちてきているかもしれませんので、無理をする必要な無いと思います。

又、橋の真ん中には人が歩ける吹きさらしの広い通路が淡路島まで伸びていますが、それは工事関係者専用の通路で、一般の人は歩くことは出来ないようになっていて少し残念です。



今日は、孫文記念館、橋の科学館、舞子海上プロムナードと訪問し、それぞれで過去の歴史を理解し、親しくしている受講生の人とも色々な話題で盛り上がる事が出来た、有意義な一日でした。



特別短期講座 再発見！なんでも見てやろう

第1回目講座（山本能楽堂）2020年9月2日（水）

池上 憲治

今日は、大阪市中央区にある「山本能楽堂」で、能の説明会があり、受講生約40人が参加して、講師の人から説明を受けました。山本能楽堂は昭和25年に再建され、約90年の歴史を持ち平成18年に国登録文化財に指定されました。

地下鉄谷町4丁目の北西すぐのところにあり、扉を開けると周りの噪からは想像出来ない異次元空間であり、橋懸かりの欄干は西本願寺の北舞台を模していて、弓状を描き舞台にやわらかさを添えています。音響効果をよくするため、舞台下には大きな瓶が12個並べられていますが、演者が足で床を叩くとその音が大きく聞こえる理由が理解出来ました。今回は能の鑑賞ではなく、予備知識というものでした。

講座の講師は公益財団法人・山本能楽堂の代表理事で観世流シテ方の山本章弘氏で、パワーポイントを使って能の歴史を説明されました。

先ず能舞台についての簡単な説明があり、能舞台の一番奥に設置された板壁は鏡板と言い、絵柄は色々あるようですが、今日は奈良の春日大社の影向の松を写したと言われる老松が描かれているとのこと。

演劇としては能と狂言がありますが、能は歌劇であり、室町時代の作品を中心に、固有名詞を使って物語が展開しますが、狂言は言葉劇で、固有名詞は無く、喜劇を扱ったものです。

能の歴史としては、9世紀の平安時代から13世紀の鎌倉時代にかけて、中国から「散樂」という諸芸能が渡来しました。それは物真似や軽業・曲芸、奇術、幻術、人形まわし、踊りなど、娯楽的要素の濃い芸能の総称で、日本の諸芸能のうち、演芸など大衆芸能的なものの起源とされています。

14世紀の室町時代中期になると「散樂」の諸芸能が「猿楽」という芸能に統合され、武家社会に流行しました。そして戦国時代には豊臣秀吉が「猿楽」を好み、自分で演じるようになり、装束や面が豪華になって行きます。17世紀の江戸時代には「式学」と呼ばれる儀式用に用いられる芸能が流行して、江戸幕府が能を武家の式楽として規定し、式楽といえば能をさすようになりました。



19世紀の明治時代になると、武家社会が崩壊しますが、商人が能の庇護者になり、能が発展しに行くようになりました。

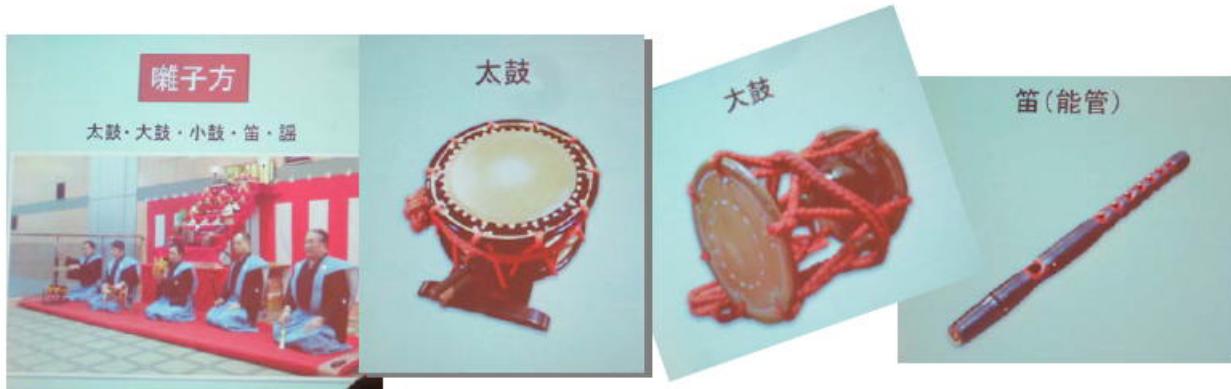
謡と演技を担当する立方はシテ方・ワキ方・狂言方の3つの役から成り、伴奏担当の囃子方は笛方・小鼓方・大鼓方・太鼓方の4つの役から構成されます。

能楽シテ方には5つの流派があり、南北朝以来の観世流・宝生(ほうしょう)流・金春(こんぱる)流・金剛流と、江戸初期以来の喜多流があります。シテ方五流のうち、芸系が近い観世流と宝生流は「上掛け」、金春流、金剛流、喜多流を「下掛け」と総称していて、所作が少し違うそうです。ワキ方は下掛け宝生流、高安流、福王流とあり、狂言方は和泉流と大蔵流の二つです。

シテ方は能の主人公を演じ、神・亡靈・女性・天狗・鬼等であり、それに応じた面を着けますが、現実の男性の役には面を着けない決まりになっています。

ワキ方は能の脇役を演じ、シテの思いを聞き出す役割があり、僧侶の役が多いのが特徴です。狂言方は滑稽(こつけい)な演技を担当する者のことです。

囃子方は笛方・小鼓方・大鼓方・太鼓方の四役で、笛は能管とも言い竹で出来ています。小鼓(こづみ)は 砂時計形の木製の胴を持つ枠付き締太鼓(しめだいこ)です。革を適度に湿らせ、調べ(ひも)を強く握ったりゆるめたりして革の張りを変え、音の高さや響きを打ち分けます。



大鼓(おおづみ)は小鼓とは対照的に革を熱で乾燥させ、調べ(ひも)できつく締めあげて金属質な甲高い音を出します。太鼓はタン、タン！という伸びやかな音が響く楽器です。

山本能楽堂で演じられる能の中から、今日は2つの演目について、講師の人に読本を基に、発生練習の仕方を教えてもらいました。それは、羽衣読本と高砂読本でしたが、横書きでしかもカラオケの音程バーのように文字の抑揚がひと目で分かるようになっていました。講師の人の説明では、上がり下がりなど音の動きを線で視覚的に表した博士(はかせ)が基準になっているとのことで、博士は京都大原の勝林院で行われている日本音楽の源・声明と同じであることが分かりました。

能の進行手順は、音曲だけのお調べで始まり、囃子方や地謡が登場後に、ワキ方、前シテ方が登場します。中入後は後シテが登場後に、シテ方が退場、ワキ方の退場そして囃子方や地謡が退場して終了となります。

全国に居る能楽師の人数は1185人で、シテ方が74人、ワキ方が50人、狂言方が137人、囃子方は185人ということで、大阪には133人ということです。

その後は、事前に募っていた参加者の中の能装束着付け希望の人が舞台に上がり、係の人の指示に従って能装束を着て行き、最後に面を着けると立派な役者が出来上がり、会場から多くの拍手がありました。

12時過ぎに今日の講座は終了しました。今日の内容をしっかりと理解していれば、実演を鑑賞する時にはかなり役立つのではないかと思いました。



9月2日(水)コース
能面と能装束の着付け体験



9月10日(木)コースの着付け体験



